

## 朝鮮・韓国陽明学特集に当たって

小川 晴久

本号（第十九号）は連載は除いて全篇を朝鮮・韓国陽明学特集とすることとなった。昨年六月初旬の編集委員会で、二〇〇七年十月十日、本学は創立一三〇周年を迎える、創刊号以来日本と中国の陽明学者を特集してきたが、肝心の王陽明が欠けていた、第二十号は王陽明を特集すると、今までの特集は一巡する、二十一号以降は新しい発想で編集に当たるとして、については本号の特集を何にするかを話し合った。従来の発想であれば、大物で何心隠がまだ組まれていない。これが第一案。もう一案は、今まで日本と中国の陽明学者ばかりで、朝鮮・韓国の陽明学者は一人も特集にとりあげられていない、一巡するに当り、朝鮮・韓国の陽明学を一括して特集してみたらどうかというものであった。この二案のどちらかで行こうということが決まり、可能性を吟味した結果、昨年七月末段階で、後者で行く条件が整った。二案とも提案者の私（小川）が編集の責任を担うことになっていたので、田中正樹編集長の了解を得て、韓国の研究者への執筆依頼に入った。三氏の寄稿、二つの古典的論文の翻訳紹介、この五本で骨格が決まり、秋の実学シンポジウムのとりくみもあったので、私の編集としてはこれが精一杯であった。しかし、最後の段階で金世貞氏作成の韓国における陽明学研究の研究文献目録を掲載できることになったのは望外の幸せであった。金世貞氏に深く感謝すると共に、そのアイデアと斡旋の労をとられ

た寄稿者のお一人韓睿媛氏にもお礼を申し述べたい。

訳出した古典的論文二篇について一言したい。一篇は一九五〇年に他界された鄭寅普先生の『陽明学演論』の末尾を飾る「朝鮮の陽明学派」と、長い「後記」の翻訳である。本特集には欠かせない。もう一篇は鄭寅普氏のお弟子で、江華学派の命名者でもある閔泳珪先生の論文である。閔先生は一昨年（二〇〇五年）二月一日九十一歳で生涯を閉じられた。学恩に感謝しつつ、この機会に訳出させていただいた。

本号に寄稿し、資料を提供して下さった四人は、韓国の陽明学研究の第一線に立つ方たちばかりである。四氏のお蔭で本特集を読めば朝鮮陽明学の我々の認識は一新するであろう。研究文献目録をみて、韓国における陽明学研究の活発さと豊かさに一驚するであろう。本誌の活用を期待して已まない。